

理科における自己調整学習の発達に 関わるリソースに関する研究

理科 齊藤 徳明
指導教員 和田 一郎

平成 29 年度告示の学習指導要領において、資質・能力が 3 つの柱として整理された。ここでは、それらの資質・能力の柱を独立して育成するのではなく、相互に関連付けながら育成することが求められている。しかしながら、このような「資質・能力の相互関連」を実現するための授業改善の視点は、未だに見出されていない。そこで、本研究では「自己調整学習 (self-regulated learning)」に着目し、本論では、以下の 3 点に焦点を当て、上記に挙げた課題の解決を試みた。

1 点目は、理科における自己調整学習の意味を拡張することである。本論では、これまで理科教育において「メタ認知 (metacognition)」と「認知」の観点から捉えられてきた自己調整学習の意味を「メタ認知、認知、情意の相互関連過程」として拡張し、理科における自己調整学習の実態を捉えることを試みた。具体的には、マッコムス (McCombs, B. L.) の提案する「認知、情意、メタ認知の相互関連」モデルに基づいた小学校理科授業の授業分析を通じて、理科学習においてメタ認知機能により認知と情意の相互関連が生じていることを明らかにした。

2 点目は、自己調整学習における情意的側面に着目し、理科学習においてそれを自己調整的に向上させるための教師の支援方略について検討した。具体的には、情意的側面をより詳細に捉えるため、アトキンソン (Atkinson, J. W.) の提案する「期待-価値理論 (expectancy-value theory)」に着目した。そして、それに基づいた小学校理科授業の授業分析を通じて、メタ認知と認知との関連の中で期待や価値が向上する実態を明らかにし、それに関わる教師の行為を支援方略として導出した。

3 点目は、自己調整学習の社会化に焦点を当て、学習の調整の社会化に伴う自己調整学習の発達の実態について検討した。具体的には、自己調整学習の社会化に関わる一枠組みである「共調整学習 (co-regulated learning)」における特徴的な活動として「アプロプリエーション (appropriation)」に着目した。ワーチ (Wertsch, J. V.) によると、「アプロプリエーション」とは「他者の中にあるものを自分の中に取り入れる過程」である。このような社会的な学習の調整過程としてのアプロプリエーションが生じる際、それに伴う自己調整学習の実態であるメタ認知、認知、情意の相互関連がどのように生じるのかについて、小学校理科授業の事例分析を通じて明らかにした。

以上のように、本論では、自己調整学習を「メタ認知による認知と情意の相互関連」の観点から捉えるとともに、教師の支援や社会的文脈がリソースとして機能することによって自己調整学習が発達することを明らかにした。